

三河アララギ

2025年 令和7年12月 師走
しわす

十 二 月 号

第 七 十 二 卷 第 十 二 号



ニューヨーク日記(230) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

STONE CRAB SEASON EST ARRIVÉE

Blue Shoe Diaries



今年もストーンクラブのシーズンがやってきましたよ！毎年10月15日からスタートです。というわけで、早速ジョーズ・ストーンクラブへ。冷たくてすでに割ってくれている爪は、相変わらずの完璧さ。白いテーブルクロスにライム、どっさりのサイドディッシュ。あの昔ながらのレストランのリズムがたまらなく心地良い。そして忘れてはいけないのが、“隠れメニュー？” 今では名物のフライドチキン。カリッと揚がっていてジューシー。このストーンクラブの爪たちに並ぶ存在感。ジョーズの食事は、季節の風物詩みたいなものでこの時期の楽しみです。

Once again, stone crab season started on October 15, and that means it's time for Joe's. The claws are cold, cracked, and perfect as ever. If you've been, you know: there's a rhythm to it. The white tablecloths, the lime wedges, the endless side dishes. And yes, the not-so-secret must-order item, the fried chicken! Crisp, golden, and juicy, it somehow holds its own next to the star crustaceans. Joe's isn't just a meal. It's a seasonal ritual. And I'm always happy to be part of it.

目次

第七十二卷第十二号(通卷八六四号)

表紙・ティーツリー	(1)	鈴木美耶子(27)	折々の詩(二十二)	ふじのけんじ(36)
ニューヨーク日記(230)	Blue Shoe(2)	牧原 正枝(28)	五感を澄ませば(42)	杉浦恵美子(38)
歌集 わが冬葵	御津 磯夫(4)	森 厚子(28)	附録(四十二)	矢崎 直人(40)
歌集「草々」	今泉 米子(5)	大武 智子(29)	『拡げる 広がる』	中屋 保之(42)
ははきくさⅢ	大須賀寿恵(6)	現代学生百人一首	『酔いの徒然』(164)	丸山酔宵子(44)
三河アララギ歌集Ⅳ	夏目 勝弘(7)	東洋大学	『雪うさぎ／冬が来たよ』	
『歌集 八千代』	岡本八千代(8)	杉田明日香(30)		
笹紅色	今泉 由利(10)	望月 奈緒(30)	絹の話(2)	高橋 育郎(46)
秋うらら	安藤 和代(12)	田中 護裕(30)	「江上浩二の独り言」	今泉 雅勝(48)
あさ空を	清澤 範子(14)	長崎 大嘉(30)	初狩便り49	江上 浩二(50)
月下美人	山口千恵子(16)	佐久間咲良(31)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬	花野みぶり(52)
円相	杉浦恵美子(18)	野上 佳鈴(31)		
満濃池へ	伊藤 忠男(20)	野畑 琴音(31)		
雅勝先生逝く	白井 信昭(22)	武田 英俊(31)	康鍼治療院	玄 翁 (56)
故郷	矢崎 直人(24)	植村 公女(32)	故郷	殿山 木風(58)
『いーとよせ』	いーはとぶ	木村 歩歩(32)	Circles of Time	Atiya Hussain(60)
		今泉 如雲(32)	編集室だより	今泉 由利(62)
		矢崎 直人(33)	「三河アララギ」について	(64)
		今泉 由利(33)		
		木 風 (34)		

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

蒔きもせぬ鉢に今年もたくましく笑き立つは蔦まか譚まん茶羅たらの華はな

搔き込みてのみにつかしやつくり問へせ噓す急くこともなき老いの夕べを

異國みもりの蝶も蝶もの眼球虹彩こうさいより癌發生きぢよの機序を得むとす

戦をのけるすがたに非ず絶えまなく大雨そそぐ青羊齒せいのの群れは

まつはれる蔓草は五種なかんづく蔓羊齒は強くほそ織くちぢれて

仙翁せんのおうの鮭色の花さかしめてわれには名のみを知る人を戀ふ

宣誓をよろこぶごとき爲政者の低俗素朴をわれは恐れむ

交錯せる本草の中を抜きいでて大明竹の若竹の青

いささかの紅梅の實の黄に熟れてみづから落つるところを見たり

ぐらぐらになりて一年保ちつつ脱けし前齒のひとつ小さし

歌集「草々」

今 泉 米 子

横着かすべなき日々か待宵の群落となりて咲けるわが庭

骨も皮もなきもの食ひて大待宵の開かぬ前に夕餉を了る

梅雨の夜の闇明るみて咲きさかる大待宵を見てあげませう

曇りガラスの外に待宵の花のゆれ風いでてこの夜雨の止むらし

庭のみちひるのゆききをふたぎつつ大待宵は闇の中に咲く

待宵の昨夜の花をしひたげて朝より梅雨のどしや降りつつく

牛乳をあたためをれば待宵の花の秀ゆれず雨間となりぬ

大明竹の今年の竹のたち揃ひたちまち暑しはや疲れつつ

朝の着替するわが部屋の窓の外押寄するごとき夾竹桃の花

土用芽のきはひ伸びつつ羊齒の類砌おほへり砌に下りず

はゝきくさⅢ

大須賀寿恵

たまきはる命のきはみ疼きくるスモンとともに生きてかゆかむ

夕べの風吹き渡りゆく縁に立ち汗はひきたり唇塩辛し

幼き日茅花を抜きて食ひし道除草剤の袋踏むばかりなり

「スモンの会の姿勢を正す会」の会報が来りて梅雨あがる雷の轟く

スモンの会入会してより三年経つ総会の通知三枚たまりぬ

スモン病みつつ勤め続けてこの年も夏のボーナスをいただきにけり

空欄の埋まれば辞むる日の来たる押印なかば終はりしわが出勤簿

月給泥棒の如く勤むるは耐えがたし訴へ終へてエレベーター降りる

コトコトと鍋にハト麦のおどるらしき音して香ぐはしき匂ひしはじむ

胃癌病む兄に飲ましめ残りたるハト麦の汁をうすめわがのむ

三河アララギ歌集Ⅳ

夏目勝弘

庭に燃す煙の流れことごとく櫛の垣根の吸ひ取ることし

揺るる枝揺れざる草とこもごもに朝の庭の土の輝き

台風は遠く過ぎゆき杜なかの土となるべき落葉が匂ふ

丈郎蜘蛛の網にかかりて揺れてゐる狂ひ咲きせし山桜の花卉

飛石の切れたるところに風道あり庭園灯の光明るく

食卓に零れてゐたる削り節吹き抜けてゆく風に動きて

耳に手を当てつつ聞かむ音のあり窓のガラスの白みそむるころ

庭なかに渦巻き移る風のあり御幣の切れ端など巻き込みて

白銅鏡の光となりたる放水路の水面に影する物なきがよい

起き上がる我を圧ふるもののあり昨夜より籠れる空氣の淀み

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

生きてゐるごとくに父の歯ブラシのまだ掛けてありま白きその柄

春になりたる朝の陽ざしざし入りて亡き父の歯ブラシに当りてをりぬ

雪かとも思へるけふのこの夕べにわれのノボタン移し替へたり

父のなき庭にも春の雪降りて犬猫に交る豚の足あと

石ひとつとなりたる父に添ひてたつ椿の花の紅のいろ

凍てつきし墓の辺の土のほぐれてけさは線香を深々と挿す

御馬海岸といふバス停より入りて海に向へる「海の家」あり

空色に塗りたる格子の鉄の門「海の家」の門はつね閉ざさるる

枯れ落葉落ちくる風の寒きけふ来り訪づるはわれのみならむ

われの手の風呂敷包みをつかみとらむ眼つきして子のわれに寄りくる

成人とも見ゆる男生徒ひとりのみ遠く離れてわれを見つめゐる

「海の家」と名づくる施設いづこよりも海見えて哭ぶ^{わら}子らの声する

おほかたは保母らが作りたるといふ千代紙赤き雛をかざれり

海ばかり見えゐる汝の二階の部屋三面鏡にも海と海の上の空

帰りゆくわれを送りて集まれり子らは鉄格子にしがみつきつつ

笹紅色

東京 今泉 由利

紫色緑色を内に秘め笹紅色の分折は光沢供なう緑色にじむ

地球なる半円ほどを飛行来しマイアミビーチに吾娘らのゐて

地球なる距離の範囲を行き来せりこの年もまた終りゆきゆく

落付きて地球に甘え地球のままに生きこしことよ百合の花咲く

見渡すは彼岸花三百万本ただただ赤したただただに赤

日本国東京恵比寿の町並に紛るる紛るる迷路細道

ビル建つる恵比寿の町の町並の私の部屋に秋陽招かむ

寂しさは淋しさのまま過ぎゆくあるがままなる合歡の花咲き

安樂を甘やかしを身に受けて奥へ奥へ生き継ぎゆく

絵師、彫刻師、刷り師、合作浮世絵日本の仕事世界へゆきぬ

秋の陽を私の部屋に導かむ桔梗科多年草秋の七草

父上よ母上よ何となつかしい今日は東京にゐて忍びをります

南極にて氷の欠けらに乗りをりし一羽ペンギン目と目と合いぬ

南極の氷の上のペンギンのゆくえを思う今日の日もまた

沢山の昔がありぬ今を生きるあのことこのことつなぎをりつつ

秋うつら

豊川 安藤 和代

木も揺れず小鳥も啼かず静かなる朝の庭に平安をみる^{あした}

幸せと思えばそれも幸せか自由時間のいっばいの日び

友からの無花果甘くみづみづと舌に心にとけ込みてゆく

吹く風に吹かるるままに揺れている木枝の強さ優しさ思う

スーパーに知らぬ幼が「バアチャン」と呼びくれし日よ心ほんわか

謙虚さが美徳時代は遙かなり吾も八十路代の意志強く待つ

空はもう鱗雲浮き日は早し息子の逝きて二年目の秋

「お似合いよ」言われて嬉しブラウスを昨日今日明日「輝」^きにつつまるる

テレビ無きを笑わば笑え己には生き方ありて月は満月

友の句が紙面に載れば嬉しくて朝見て昼見て夜も又見る

入つ陽が遠く温室に反射して六階の窓まぶしく照す

秋うらら寺院も神社も輪の中に真赤つかつか夕陽が沈む

髪切りて耳にやさしき秋の風なぜか遠くで母の声する

ひたすらに短歌詠み来て七十年吾が人生に悔の残らじ

遠き日を泣いて笑ってホームの夜老いても友の笑くぼは消えず

あさ空を

春日井 清澤 範子

ホーム出て娘に車椅子引かれつつ三科の受診今終わりたり

ホームの換気二分なり冷気を閉じて朝食いただく

あさ空を見上げてしばし休むなり病院連れゆく娘に感謝する

八月に大腸検査がある予定娘に負たんかけぬよう頑張り生きる吾のためにアピ

タからアイスクリームまたチョコレートなど買い来てくれぬ

まず今日ののどのお通しは類さん好む酢サバの弁当なり

朝から気温三十度こんな日は熱中症にならぬようクーラー入れて静かに休む

娘と二人の家族にてTの字廊下拭くもせつなくて

小鳥の声ききつつ朝のお味噌汁娘と吾との共同作業

汗だくになりつつ娘はクーラーバックを持ち買物に出ず

徳洲会病院にて始めてリハビリ足の前後の運動を教わりながら練習をする

また朝が来た娘は手ぎわよく朝食の仕度手ぎわ良く

まず起きてのどを通すは抗ガン剤のみ始めてより半年になる

吾の足具合悪ければつきつきと娘の負担増えるばかり「娘よありがとう」

月下美人

豊川 山口千恵子

屋敷の草取りゐて見つけしものの一つ紅の色こき水引草の花

生ひ茂るゴーヤの蔓の下蔭に大き実一つ見つけて楽し

庭先に置きたる月下美人の鉢に一つだけなる蕾に気付く

今日あたり花開くらむ一つ蕾咲きたる花見む忘れず見やう

香りつつ花開きたる白き花月下美人を一人見てゐる

垂れ下がる花殻一つ朝見つ月下美人は一ときの花

赤々と畦道に咲きゐし彼岸花花々枯れ立つ長き畦道

道端の草の中よりのび立ちてツルボのむらさき秋となる日々

忽ちに家三軒の建ち並ぶ媼一人の住みゐし跡に

田の溝はコンクリートのU字溝生ひ繁りゐしミゾソバ絶えたり

取り入れの済みたる田んぼに烏一羽はね黒々と艶々と立つ

やせやせしトラ猫今朝も垣根の前の日向に寝そべり逃げても行かず

高く高く皇帝ダリアは天を指す知らぬまに伸び知らぬまに咲く

屋敷畑たがやし植ゑし豌豆の苗わが細ぼその家庭菜園

閉店にシャッター閉す店先に明かあか灯る自販機の灯

円相

蒲郡 杉浦恵美子

ダウン症金澤翔子の書展観に出掛けて行きぬ佐鳴湖南畔

三河より一時間しか掛からぬが遠州佐鳴湖煌めく湖面

墨汁をたっぷり含みて一瀉千里金澤翔子の巨大な円相

円相を観れば浮びぬ北斎の怒濤の先の飛び散る波頭

障害など一様態に過ぎぬとも思ふ金澤翔子の円相

円相とは何ぞや無垢なその心そのまま訴ふ金澤翔子

あんなにも小さな躰の何処からこんな見事な円相生まるか

大広間壁一面の般若心経生涯唯一の大作ならん

ダウン症金澤翔子の成し得たる書作品群氣圧さるばかり

かの母は娘の才能見出して血の滲みたる母娘の道程

母と子の二人三脚三十年余金澤翔子に伴走ありけり

母高齢娘を支へ得ずなりて四十歳を期に筆を措くとぞ

母と娘が息を合せて四十年その濃密さ我にはなかりき

失せ物を探しあぐねて諦めてひよっこり見つけぬ鞆の片隅

失せ物は祖母の呉れたるナイロンの花柄ピンクのあづま袋ぞ

満濃池へ

大阪 伊藤 忠男

香川への道は不思議や瀬戸の海小島現れまた隠れたり

橋の下潮競い合う鳴門海カモメ騒がし白波の立つ

山越えの険し細道曲がり降るいのち預けて握るハンドル

トンネルを過ぎて降りくる激し雨霞む行く手に目を凝らし見る

千年の時は今へと引き継ぎていのち潤す満濃の池

決壊を防ぐ手立てはここかしこ自然に学ぶ空海の技

カーブしてこの地に収まる堤かな土木の心そこに息づく

自然との調和あるこそ頼しや我ら守りて今もあるなり

堤体に立ちて見渡す水面そよ風吹きてさざなみ揺れる

谷底の川の白瀬を右左下れば広く霧は晴れ行く

谷筋を背にし眺る讃岐野は収穫近く黄金に染まる

空海の心こもれる溜池にいのち託した日々があるなり

物は皆磨けば光り価値を増す人の心も同じなるかな

歴史とは巡り巡りて繰り返す今の世にして偉人あらむや

本広げ読み入る日々はまだ遠し書斎の西陽暑さ残れり

雅勝先生逝く

豊川 白井 信 昭

庭中の豆板路にまたしても秋成り胡瓜きゅうり踏みてしまえり

隣れるを通りぬけ道悉くカイズカイブキ枯色なれり

土留垣起点柱より三メートル基礎立ち上げにU字溝据えん

嵩上げの石囲の中球根なかすべて春を頼みて植え戻したり

带状疱疹たいじょうほうしんワクチン接種二回右腕痛める副反応とも

今日よりは暑さ and らぎ土留垣ベースをハンマに打ちはがしゆく

障子戸にLEDの明かり避けて寝る雨降る夜うれし球根思えば

農道の用水路沿い赤白黄彼岸花あまた今を盛りと

十月号三河アララギ届きたり雅勝氏訃報今し知りたり

御堂山頂上歌碑にて建立者今泉雅勝氏五十三年過ぐ

ペンネーム故御津磯夫詠みし和歌^{うた}丹野城址に思いは及ぶ

今は亡き今泉^{いさお}功先生歌碑一基を山の頂上まで運び据えにき

月毎を雅勝先生『絹の話』掲載つづきて惜しまるるかな

わが居間に息子弾きしピアノ五歳より毎年調律音色かわらず

土留垣球根の幾つほつほつと今日という日の新たな芽生え

『複眼人』

埼玉 矢崎 直人

夢中飛行『複眼人』の読書会新たな一歩歩み始める

舌足らずな僕の言葉を引き取りてくれる助けのえのこぐさゆれ

動く棚動かす心夢中飛行読書人たる読書する人

破芭蕉『複眼人』の物語嵐の後に残されるもの

切り離す『複眼人』のまなざしの一つ一つの宿れる命

秋涼し台湾文化語られる食と文学語るランチで

参道の華やぐ着物七五三氷川神社の朱色の鳥居

菊の花花びら絵筆で整える出品の菊一枚一枚

ボート池モーターボートがゆつくりとゴミを掬いて開店準備

日本の神話は土の記憶から土と植物動物たちの

風布 f o o p u U d o n n 吉川産のネギ香る肉汁うどんコシと喉ごし

風布うどん『埼うつどん！スタンプラリー』台紙をもらいスタンプ押さる

新都心『武蔵野うどん専門店 とこ井』は店内製麺の麺

辛口のうどんの辛さ増して来る豚肉たっぷり丼も食ふ

平塚神社甲冑を地に埋めた塚上中里の駅の坂道

『いーとよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

ふと思ふ井守は居るのか外の池守宮が話題の歌会の席

水野 絹子

参道を支へる石垣雨に濡れ駆けし幼き我の泛び来

銅像の見つめる先に新校舎町の行く末いかに思はむ

同じ場所に居ても思いは様々。守宮の歌で盛り上がっているのに井守を思い浮かべる自分が可笑しかったです。

着々と進む建物工事現場大きな器機空にそびゆる

牧原 規恵

一階二階すぎ三階へと取りかかる着々進む建物工事

雨の降り枯れかけをりし草の間より緑の生き生き高く伸びる

いーはとぶの皆で公民館の部屋の窓から見える景色を歌いました。題材の決まっている歌作りは新鮮でした。

緊張の歌会終はればその後のおしゃべり始まりあれやこれやと

稲吉友江

歌会の送り迎へは夫にして感想聞かれ我は項垂れる

八王子さんへの長き階段母の手を引き登りし遠き日のこと

年数だけは経っているのに上達しない自分に反省しきり。素直に詠もうとしても雑念が入ってしまいます。

長月のけふ勉強会の窓の外そつと窺ふ細々と雨

鈴木美耶子

大江山百人一首の六十番私けふは音読当番

ググググッと西浦学園建ち上がり勉強会の窓に迫り来

九月の勉強会九月十二日当日の『勉強会の窓から、勉強会のめぐりから』を歌ってみました。初めての試みです。

西浦の発展の祖なる岡田翁いくつの学び舎見守り給ふや

牧原正枝

青銅の紋三郎翁の凜凜しさよ馬の二頭のレリーフ従へ

銅像はすつきりとたち拝せしに生垣高く草も茂りぬ

西浦の偉人、岡田翁は子供の頃は側に寄れず仰ぎ見ていました。新校舎建設に伴い昔を思い足元まで昇りました。

勉強会の窓の向かふの校庭は今や見上ぐる作業現場

森厚子

小学生の頃のわたしは勉強も楽しかりけり放課放課後も

中一の吾ら毎朝廊下ふきし春には閉校牛舎となりし

勉強会の窓辺から見下ろしていた校庭の作業現場。今や見上げています。私も中一で閉校を経験しました。

ざつと読み無益と判断されし本わが玄関に三週間置く

大 武 智 子

読みたいと言ひしはあなた返されて戸惑ふ二冊の川上未映子

捨て台詞の如き言葉に息を呑むわれの読みたきテイストに非ず

ちよつとした言葉の行き違いが心と心の距離を遠くした出来事。人の心とは？七十を過ぎてもわからない。

現代学生百人一首

東洋大学

自信作そう昨晩は思ったが今日の私が消しゴムで消す

白百合学園中学校2年 杉田 明日香

言い方で伝わることは変わるから最大限の私で話す

専修大学附属高等学校1年 望月 奈緒

「ママ」と呼び「お母さん」と言いなおすなお照れくさい十三の夏

高輪中学校2年 田中 護裕

母入院男4人の夏休み小言はないが明るさもなし

貞静学園中学校1年 長崎 大嘉

ふと思う私の夢はなんだろうソーダの泡がはじけて消える

田園調布学園中等部2年 佐久間 咲良

マスク越し飽きるほど見た君の顔弁当開けばまた別の君

東京都立日比谷高等学校3年 野上 佳鈴

文化祭初の対面ミュージカル拍手はこんなに嬉しかったか

東京都立日比谷高等学校3年 野畑 琴音

子は学科親は学校選ぼうと言い争うは三者面談

東京農業大学第一高等学校1年 武田 英俊

『俳句』

銀漢や円楽を聴く夜のしじま
総立ちの拍手喝采曼珠沙華
木枯や交番前の待合せ

植村公女

声ひそめ隣の庭に虫の声

木村歩歩

駅出でて凄まじき雨走り抜け
御会式のよいやさ響く大通り
雨上がり匂い芳し秋の薔薇
秋の夜に带状疱疹住みつきぬ

宅配車一台行くや刈田道

今泉如雲

秋霖や出羽にも戊辰戦ありし
出羽路かな車窓に林檎柿菊も

秋めける夢中飛行の読書会

矢崎直人

舌足らずな僕に優しや猫じやらし
ゴミ拾ふモーターボートうろこ雲
冬めきて武蔵野うどんめぐり食ふ
銀杏散る平塚神社は坂の上

土佐みずきの青実の赤くなりしこと

今泉由利

太陽は50億年の命の途中

アインシュタインのE=mc²に出合い

ピアノにて「雨だれ」終る左はじっこ

小豆なる天領馬路大納言

あの花もこの花もまた春草々

雲越えて入道雲も越えてゆく

「雨だれ」の今日一日のフレデリック・ショパン

芋、団子、枝豆、薄、月を待つ

確かなる五億年月過ぎゆきぬ

曼珠沙華天までのぼる無門丘
さやけさや寝転びながら小望月
銘酒あり飲むにあたいす小望月
名月や嫦娥はきぬを着乱れて
鼻はきく金木犀がと妻は言い
群すずめ稲実るころ記憶あり

木風

猛暑過ぎ秋雨愉しむ散歩道
吟詠の声高らかに秋気つく

雅風

大声で吟ふ八十路や天高し
木の椅子にはおずき鳴らす小女かな
ふるさとの名勝変わらぬ東尋坊

春山

精美

秋時雨金色あとに月見坂

郷泉

奥入瀬をゆるり流れる里の川

孝

立山の空にくつきり天の川
風鈴の音に忘れる猛暑かな

彼岸花姉妹つどい墓まいり

よし乃

吟行会どこへ行くかと夏の旅

紀風

つゆ入りに熱風吹きし眠れぬ夜

電車内吊輪使わずスマホ見る

正面に富士山描く山の絵

自転車が止まらず走る歩道なり

夏合宿校内からのバスの旅

折々の詩(二十二)

ふじのけんじ

赤いランドセル

学校の帰り道
何人かに囲まれた
散乱した持ち物が
踏みつけられる

地面に叩きつけられた
黄色い帽子
もうやられると屈んだ

その時 立ちはだかった
赤いランドセル
たったひとりで
彼らに立ち向かう

その氣力に押されて

彼らは

あらずさるしかなかった

決して体の大きくない

あの娘の勇気が

家族以外で

初めて自分を守ってくれた

あの時彼女が背負っていた

ランドセルの 赤が

私の生きる方向を

指し示してくれた

あれから時が経ち

今はもう彼女の居場所も分からない

ただ たしかに

白髪になったわたしの

胸をまだ火照らせている

五感を澄ませば（42）

杉浦恵美子

鶴の恩返し

最近、あることで昔ばなし「鶴の恩返し」を改めて読む機会がありました。

日本人なら、誰でも子供の時から親しんでいるお話。

またこの話を基にした木下順二の戯曲『夕鶴』の「つう」役の山本安英の舞台は圧巻でした。

慣れ親しんで来たのに、今回初めて気付いたことがあります。よく知られているのは承知の上で、何処なのか、あらずじをご紹介。

①昔々貧しいけれど心のやさしい老夫婦がいた。ある寒い日、お爺さんは道すがら、毬に脚を挟まれ苦しんでいる一羽の鶴を見つけ、毬を外してやった。

②その夜、旅の途中、雪の中で道に迷ったと言って娘が訪ねて来た。老夫婦は困っている娘を中に入れ、温かいお粥を食べさせた。娘はこれからどこへ行く宛もないと言うので、一緒に暮すことになった。

③翌朝、娘は布を織るための糸を頼むと、「絶対に部屋

の中を覗かないで」と機織り部屋に入り、やがて大変美しい布を抱え、出て来て言った。「これを町に売りに行ってください。きつといいお金になりますよ」布は高い値段で売れた。お爺さんは喜んで、さらに糸を買って家に帰った。

④その晩も次の晩も娘は布を織り、お爺さんは町に売りに行った。しかし娘が日増しにやつれて行くのを心配した老夫婦はついに部屋の中を覗いてしまった。するとそこには、長いくちばしで、自分の羽を抜いて、布に織り込んでいた一羽の鶴の姿があった。

⑤覗かれたことに気付いた娘は、以前より痩せ細った姿で、布を抱え、部屋から出て来た。「命を助けてくれた恩返しに来ましたが、もうお別れです」と言い、鶴に姿を変え、空へと飛び立って行った。

この昔ばなしも、細部を比べてみると微妙に語り口が異なりますが、それはさておいて、

私が気付いた箇所は④にあります。

それは布を織るための「糸」のところ。

布には経（たて）糸と緯（よこ）糸がありますね。

娘が布を織るための糸を頼み、お爺さんが町で買って

来たのは、経糸だったのかと改めて気付いた次第。それまでは頓着していませんでした。

つまり鶴は自分の羽を抜いては、経糸の間を横方向に交差させて通していたのかと。

真っ白で、毛皮のようにふわふわした布が織り上がったのでしょか。

誰も見たことのない布でしょう。昔の人の想像力の奇抜さに感心。

また機械織機が身近にあれば、経糸と緯糸の関係も一目瞭然でしょうが、私の場合、気付くのに半世紀以上かったことに。

さて折角なので、以下調べてみました。

「経糸と緯糸は、織物の基本的な構成要素。

経糸・織機に垂直（長さ）方向に張られる糸。

・ 通常、緯糸よりも強い撚りがかかっており、引つ張る力に耐える強度が必要。

・ 織物の土台となる。

緯糸・織機に水平（幅）方向、経糸に対して直角に交差するように通される糸。

・ シャトルやレピアなどの道具を使って経糸の間に

織り込む。

関係性 この二種類の糸が互いに交差すること（織り）

で布（織物）が作られる。

経糸が織物の構造的な骨格を形成し、緯糸がその間を埋めて布の密度やデザイン、風合いを決定づける。」
ところで、『糸』と聞けば、中島みゆきの名唱を思い浮かべる方も多いのでは。

「縦の糸はあなた 横の糸は私

織りなす布は いつか誰かを

暖めうるかもしれない

縦の糸はあなた 横の糸は私

織りなす布は いつか誰かの

傷をかばうかもしれない」

糸は糸でしかありませんが、織りなしたらそこには多彩な物語が生まれるのですね。

忘却の彼方なれども蒲郡紡織の街ガチャマン景気

附 録（四十二）

矢 崎 直 人

秋めける夢中飛行の読書会

夢中飛行の読書会に参加しました。今回読んだ本は、呉明益 小栗山智訳 『複眼人』（角川文庫 令和七年）。台湾の作家のSF作品でした。この読書会で読むことになり初めて読んだ作家でしたが面白く読めました。

台湾の置かれている状況と文化人類学の知を架空の島の設定に表現され、現実にかけている環境問題の深刻さを深い悲しみで感じさせられました。「複眼」というのは①昆虫・甲殻類などに見られる眼で、多数の小さな個眼（小眼）が束状に集まったもの②比喩的に、二つ以上の視点から物事を見ること（広辞苑）のことです。これを作家の手腕によって物語の語り手に仕立てあげられています。

読書会では五、六人の方が三つのグループに分かれてそれぞれのテーブルに一人中心の方がいて、読んできた感想が語られました。一人で読んでいてもよく分からなかったところを話してみると、他の方の話に気づかされることであって読書会の醍醐味を味わうことが出来ました。

動く棚動かす心夢中飛行読書人たる読書する人

冬めきて武蔵野うどんめぐり食い

「武蔵野うどん」は「温かなつけ汁で食べるうどんで、埼玉県西部と東京都多摩地区にまたがる武蔵野の地で育まれた郷土食」（永谷晶久『どうだ！埼玉うどん伝説！！』大空出版令和七年）だそうです。食べてみたら美味しかったので、食べ歩きしています。十月からスタンプラリーが始まったようで押してもらいました。三月までに何店舗回るでしょうか。

風布 f o o p u U d o n n 吉川産のネギ香る肉汁うどんコシと喉ごし

風布うどん『埼玉うどん！スタンプラリー』台紙をもらいスタンプ押さる

新都心『武蔵野うどん専門店 とこ井』は店内製麺の麺

辛口のうどんの辛さ増して来る豚肉たっぷり丼も食ふ

『 拡げる 広がる 』

中 屋 保 之

今年も秋が置いてけぼりにされ、年末を迎えることになりそうである。あれ？ 置いてけぼり 置いてきぼり どちらだっけ?! NHK朝ドラ「ばけばけ」は、小泉八雲の妻が題材で、謂わずと知れた「怪談」に関りがある。あれ？ 関り 関わり どちらだっけ?! 拡げだすと広がり、際限が無くなる。

置いてけぼりを「拡げ」てみた。江戸時代の都市伝説に、『本所（現在の東京都墨田区）七不思議』として伝承される怪談話があるとの事。その中のひとつに、『江戸時代の頃の本所付近は水路が多く、魚がよく釣れた。ある日、仲間と錦糸町あたりの堀で釣り糸を垂れたところ、非常によく釣れた。夕暮れになり気を良くして帰ろうとすると、堀の中から「置いていけ」という恐ろしい声がしたので、恐怖に駆られて逃げ帰った。家に着いて恐る恐る魚籠を覗くと、あれほど釣れた魚が一匹も入っていなかった。』がある。落語のネタなどに多用されて 置いてけぼりとして「広がっ」といわれる。

例年、夏になると「戦後〇十年」の見出しが増える。今年は「昭和百年」で「戦後八十年」との事でとりわけ多かった気がする。帯紙の「あの戦争は何だったのから20年、偽善を排した 大人のための現代史」に惹かれて、保坂正康著「なぜ日本人は間違えたのか 真説・昭和100年と戦後80年」を読み始めた。間もなく《東條について書くなんて右翼だ》という小見出しが目にとまった。項の後半に〈政治学者の袖井林二郎氏は「等身大の東條を初めて

書いた」と書評で褒めて下さり」とある。えっ？あの袖井さんの名が?!まさに、「広が」たのである。

知人から紹介されて「昭和天皇（福田和也著）」を読み始めた。前述の本と併読している。その第一部に、「舟艇守の尺八」（当誌9月号参照）のモチーフとなった「矢代六郎」についての記述が載っていた。曰く《山本権兵衛が、その手腕で海軍を作ったとするならば、矢代は人格によって作ったといってもいい。秋山真之や広瀬武夫といった明治海軍の逸材は、いずれも矢代の膝下から出ている。》とある。以前習った広瀬武夫作の漢詩「家兄に寄せて志を言う」に広がった。「山本権兵衛」を拡げると、私の祖父の上官だったそうである。生前よく、山本権兵衛いう人は、偉い人だったちゃ」と富山の方言で聞かせてくれたのを思い出す。

猪瀬直樹作「昭和16年夏の敗戦」をNHKがドラマ化して放映、題材になった「総力戦研究所」の初代所長飯村讓（陸軍中将）氏の遺族が、事実とは違う設定にされたとして訂正を求めたことでも話題になった。原作を読みたくなくて購入し、一気に読んだ。軍・官・民の優秀なメンバーでシミュレーションした結果、日本は『必敗』と結論づけたにも拘らずそれを活かすことなく敗戦に至る。この時期に綿密な情報と的確な分析を成した人々が実在したことに驚きを感じる。このメンバーに、三淵乾太郎の名がある。初の女性弁護士となった三淵嘉子の夫である。これを知ったのも『拡げる 広がる』の賜物か。映像は一瞬で過ぎ去ってゆくが、活字は想像を、拡げる、時間を提供してくれるので好奇心が、より、広がる、ように思う。因みに、「昭和天皇」を薦めてくれたのは横山精真氏である。

『酔いの徒然』（二六四）

丸山 酔宵子

『道後温泉のハイボールと四万十川の舟くだり』

天高し、秋晴れの羽田を飛び立って一路松山空港へ向かったのは、MBL（メジャーベースボール）ワールドシリーズ第三戦の真つ最中で、大谷翔平選手が一回の二塁打に続き、二打席目でライトへのホームランをかつ飛ばした時である。ドジャースの行方が気になる中、無事松山空港に着陸し、道後温泉に着いたのは、午後3時過ぎである。

さすがに、6時間も過ぎているからワールドシリーズも終わっているだろうと、テレビを点けてみれば、何と、延長17回で5対5の同点でまだ続いているではないか・・・。

荷物のかたづけは後にして、テレビにかぶりつき。とうとう18回の裏、フレディー・フリーマンがバックスクリーンへのサヨナラホームランをかつ飛ばし、劇的な幕切れとなったのである。

夕食までにはまだ時間が十分にあるので、高台にあるホテルを出て道後温泉の散策である。重要文化財・道後温泉本館を中心に夏目漱石の坊ちゃんや正岡子規、秋山真之などのゆかりの史跡が並び、温泉街の雰囲気を出す商店街が続いている。

松山には何回か訪れたことがあるが、吞兵衛にとつて以前から聞いていた「サントリーバー露口」には、是非行つてみたいと思つていて、今回の旅行の前に、グーグルで調べてみたところ、2023年9月にオーナーマスターである露口貴雄さん（86）が亡くなり、63年の歴史に幕を閉じたとのことであった。

ウイスキーとソーダと氷。その3つで作られるハイボールが名物で、これを求める人が全国から足を運んでくる店であったのだ。

晩秋の陽が落ちる道後温泉繁華街を歩きながら、ふと、「道後ハイボール酒場 さらん」の派手な花輪が飾つてある店が目飛び込んできたのである。矢張り、松山には露口マスターのハイボール文化が根付いているであろうと、早速カウンターへ一直線。カウンター前には、サ

ントリー角が照明に照らされて整然と並べられている。

「角ハイボールをお願いします！」と元気よく頼むと、シツクな黒で纏めたスタイル拔群、色香を湛えた熟女が、冷えたグラスを取り出して、「レモンを入れますか：？」と手際よく、角ハイボールレモン入りを目の前に出してくれる。

「矢張り、松山はハイボールなんだ。露口さんの影響は凄いいもんだね・・・。」

「そうですね。露口さんは2年前に亡くなって店は閉まってしまいましたが、松山のハイボールは生きてますよ・・・。」

因みに、「ハイボールの聖地」として全国のファンに親しまれ、2年前に閉店した松山二番町の老舗「サントリーバー露口」。一枚板のカウンターなど店内の設備や備品は、サントリー山崎蒸留所（大阪府島本町）に移籍されている。63年にわたり洋酒文化を支えてきた空間の記憶が、日本初のモルトウイスキー蒸留所で生き続けるのである。

翌日は早朝よりバスで出発し、宇和島経由で高知へと向かった。晩秋の雲一つない快晴の中、海沿いに只管、走って行くのだが、四国は本当に緑濃い深い山々に囲まれている。そんな深い山々を源流とした四十万十川での優雅な舟くだりである。

四十万十川は高知県の西部の深い山間をくねくねと流れる全長196キロメートルの日本最後の清流と言われている。大雨などの災害時は想像を絶する増水で、暴れ川とも呼ばれ、欄干の無い沈下橋が47箇所もある。鮎、鰻、ノリなど様々な魚介類の宝庫で、今日の舟くだりでは、鮎塩焼き付きの幕の内弁当である。

晩秋の爽やかな昼下がり、清流のそこかしこで鮎が飛び跳ねている。岸边には赤色が増した蓼が密集し、川面に赤く映しこんでいる。そして、その蓼の横には優雅な鷺が蓼の横に片足で休息し、ゆったりと限りなく透明で穏やかな四十万十川の清流を眺めているようだ。

水清く舟に揺られて鮎の昼

酔宵子

雪うさぎ

高橋 育郎

白いうさぎは

月夜の晩に 庭に出て

雪うさぎ

踊ってはねる 夢みてる

母さんつくってくれました

赤いお目々は 見えています

それから春に

春のくる夢 見えています

なりました

雪のうさぎは

雪のうさぎは 溶けました

盆のうえ

けれども ぼくには見えています

二つ並んで ありました

あの日とおなじ 雪うさぎ

冬が来たよ

高橋 育郎

1 寒くなったね 冬が来た

雨戸が かたかた音たてた

テレビが 初雪 知らせたよ

かあさん セーター着てました

2 寒くなったね 冬が来た

学校へ行くとき かあさんが

ゆうべおろした セーターに

たんすのにおい しみている

3 寒くなったね 冬が来た

かえりは近道 うらのみち

4 寒くなったね 冬が来た

おうちへかえると ストープが

あかあかもえてる へやのなか

おやつのココアも あったかい

5 寒くなったね 冬が来た

こがらしやんで 静かです

チロチロまたたく お星さま

むかしはなしを しています

絹の話(2)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

絹はいつ、どんなきっかけで作られ始めたのでしょうか。

戸外には蓑虫や天蚕の様に大きな繭(野蚕)を作る虫はあまたいるにも係わらず、人々はクワコと言う桑の葉を食い荒らす小さな繭を選んで品種改良を重ねて、今日の白い繭を手に入れました(家蚕)。

繊維は土器の様に残らないので、はっきり確証は有りませんが、およそ五千年前中国で作られ始めたようです。今日でも東南アジアやアフリカなどでは繭の中の蛹は栄養豊富な大切な食料品で、食品マーケットで日常売られています。日本でも長野県などでは今日でも食べています。

繭の中の蛹を取り出す事は、今日では鋭利な刃物があるので簡単に繭を切って蛹を取り出せますが、青銅器も

ない当時は大変困難であったようです。繭は簡単には切れないのです。繭を集めても10日もたつと蛾になって飛んで行ってしまいます。何とか食べようと繭ごと口に入れて噛んでいた様です。

すると、口内の唾液と温度で繭を固めているに材質が解けて口から真綿を細く引き延ばした様になったり、時には目に見えないほど細い一本の糸になったりしてスルスルと出てくるのです。この事にヒントを得て湯の中に繭を入れて湯気と一緒に上がって来る細い一本の糸を巻取る事が出来る様になった様です。(当時の繭からは300m〜400m位、現代の繭からは1500m位の糸がとれます)

ところが広葉樹林の山野に多種多様生息する野蚕の繭は口で転がしたり、お湯に入れたくらいでは簡単にほぐれて糸になりません。もっと以前から野蚕はほぐしてつむぎ糸にして使われていたようですが、糸が茶、うすグリーン、ベージュ等有色で、白と言う当時の需要にはか

なわなかったと思われます。

一昨年豊橋丸栄でワイルドシルク展をしている時、年配のお客様が、白い繭を見て、なつかしそうに「子どもの頃繭を口に入れて糸を出して遊んだものです」と言われた時は歴史の彼方を思い出し、感銘を受けました。

一粒の繭から上げた一本を中国の殷の時代の甲骨文字には「忽」と書かれております、さらに5本束ねたものを「糸」、糸を二つ合わせた物を「絲」と表しています。
(これが今日生糸とよばれる物です)

絲を合わせて毛、毛を合わせて厘。

明治政府は絹を産業の中心に据えて立国するに当り、円以下の単位を絹糸の太さと同じ呼称にした事を思うと、明治の人々の高い教養と意気込みに感じ入る事しきりです。

「江上浩二の独り言」 96

江上浩二

長島茂雄さん

長島さんが今年春旅立ってから約半年が過ぎ、久しぶりであるTV番組で肉声をお聞きました。それは、2004年、最初の病に伏せられてからのお声で比較的に明瞭に話されていたので、公の場に現れてからのものと思われる。

それは2005年7月ごろ以降であろう。その時期は私が52歳でサラリーマンを早期退職して、約半年が過ぎ、屋号を税務署に届け、個人事業主として営業をし始めた頃で、長島さんがお元気になられ活動再開をとともに期待する余裕もなかった。

実は私は本物の長島選手や長島監督を見たことがないはずである。見た記憶がないのである。これは、長島選手の引退試合が1974年10月14日に行われ、それは私が大学3年生の時、まだプロ野球のリアルタイムデー

ムを高価な入場券を購入して迄の余裕がなかった。

実際、私が生のプロ野球の試合を観戦し始めた時期は、大学院の研究室へ入室が許され、新しく赴任されてきた若手の助手さんの指導を受け始めた時期に一致している。早くても1977-78年の頃であった。理由は簡単でその新しい助手さんが西日本のご出身で、あるチームを応援していたからで、まだドームの無い、後楽園球場のナイターに時々出かける様になった。

長島さんの MIN で確認したところ、

しかし本大会を約半年後に控えた2004年3月4日、脳梗塞で倒れ入院。

一命は取り留めたものの利き手を含む右半身に麻痺が残り、言語能力にも影響が出た。

長島や周囲はオリンピックでの復帰を考えていたが、短期間での病状回復は不可能と判断され、一茂が「(アテネには)行かせられない」と記者会見を行った。

と記され、

その後の悪化していく病状については、多くのメディアのいかに長島さんに永らえて生き続けて欲しいという書き方が悪いが、長島さん自身の意識した生きる望みを表現した類のもの見当たらず、メディアが今流のネット環境社会の商材として長島さんを利用し続けられればいいという思われる表現にしか私には読み取れなかった。

少しキーが高く、年齢より少し若く発せられるお声で、

私がこの様な姿になって、皆様の前に出続けるのは、障碍者の方々も生身の現実を隠さず、リハビリに取り組んでいる姿を晒して「さらして」まで、皆様に見て欲しい、何も失うこともないんだ。

という長島流明けっぴろげスタイルの強さであった。

私は、長島さんのそんな姿が印象的で好きだった。

後記、本当はジョンレノンと長島茂雄をだぶらせた私の眩きにしかかったのだが、それが叶えられなかった事をお許し頂きたい。

初狩便り
(49)



花
野
み
ぷ
り





コンバイン

コンバインは、和名では、「刈取脱穀機」と言う。初めてコンバインを見た時は、なんてすごい機械なんだろうと感動したのを覚えている。稲を刈取りながら田んぼを進み、同時に脱穀し、稲藁は裁断して、田んぼに撒いていく。おまけにコンバインは、稲架かけにした稲束を脱穀するだけの仕事もできる。昔の農家の納屋にあった、稲刈鎌、脱穀機、唐箕とうみ、押切機など、さまざまな農具が文字通りコンバインに結合された複雑で大規模な機械なのだ。ナンバー・プレーとも付いているので公道も走行できる。ただ、年に二度、稲刈の時しか出番がないので、目にしたことのある人は多くはないと思う。

こんな大事なコンバインがまさかの故障となった。それも二回も！ キャタピラーが経年劣化で切れるアクシデント。その三日後、油圧ミシシジョンオイルが漏れだし、踏んだり蹴ったり、泣きつ面に蜂となった。修理が終わり、コンバインが働き始めると一気に稲刈は進んだ。

来年もいろいろあると思う。おいしいお米のために力をあわせて農作業するよ。みなさん一年間お疲れ様でした。

(写真 菅野昌英 尾辻雅昭 矢野都紀子)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
<https://hondachiro.exblog.jp/>

2025年10月24日

そろそろ乾燥予防です

いつまでも寝れそつな気温と天気です
ね風が冷たく 天気予報の最高気温より
寒く感じます

身体を冷やさなように

手洗い うがい アルコール消毒

を忘れないようにしましょう

気温が下がるといふことは

乾燥が始まるといふことです

肌がそれほど強くない方々

そろそろ あれの出番です

そつです

ワセリン です

乾燥してから塗るのではなく

肌のつぱり や うるおい が

減ってきたら塗り始めましょう

身体はもちろん

手もある前に ワセリン+アトリックス

で 手洗いでアトリックスがはがれ

ワセリンで手は守られているので

あかぎれ や ガサガサ を防いでくれます

その後は

アトリックスを重ねて塗っていきましょ

う 乾燥予防していきましょ

今日も笑いながら楽しんで行きましょ

2025年10月27日

シンプルにウイルス予防

今朝は ところ最近の朝に比べて

寒さをあんまり感じません

またまた寒暖差が出そうな一日になりそうです

寒暖差が出ますと 体調を崩しやすくなり

ウイルスに感染しやすくなります

御自身でできるウイルス予防として

手洗い うがい マスク アルコール消毒

3S + ゆたぼん + ヨーグルト + 八分 + 湯舟 で

基礎体温を上げ 腸内環境をあげる

などがあります

もっとシンプルにすると

体力を落とさない ということが大切になります

では どうすればいいのか？

よく食べ よく寝る ということです

食欲の秋 にしろ 昔の方はシンプルに極論を

いっています

改めて尊敬ありません

23時までには寝て

その日の疲れを取り 免疫力を上げる

食事も旬の食材をしっかりと食べる

もちろん 食べ過ぎずほどの八分で

そうすることです

日々の疲れやストレスを翌日に持ち越さず

きちんと毎日確実にリセットする

とても大切なことです

1日1日を丁寧に通かせたらと思います

今日も笑いながら楽しんで行きましょう

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄 翁

「腰痛 精の悲鳴なり」

腰は腎の府 大関節
すべての動きに関わって
身体支える土台となる
腎には精が蔵されて
精の力は 若さの元で
精が充実していれば
筋骨・肢^{しん}体は充実し
動きも力も発揮して
老化を遠ざけ 元気となる
精は精神の精であり
精が充実していれば
目は明^あき 意識は聡明で
集中力や思考力
維持して 頭が働くぞ
逆に過労で身体を
酷使し休まず居るならば
精は消耗 虚^そしてい

土台を支える力なく
腰に負担がかかる故
腰の痛みになってゆく
頭や目などを使いすぎ
情報過剰で 興奮続けば
脳や髄から 精虚して
骨の中心 消耗し
背骨の髄が枯れていき
やがては腰痛となつてゆく
腰痛は元気や体力の
消耗 土台の虚の証
精の養生 しっかりと
休まにや 必ず枯れていき
無視すりゃ 更に消耗し
治らぬ腰痛に発展す
腰痛 身体・精神からの
これより動いてくれるなど
悲鳴と捉えて 割り切つて
ゆつくり休んで 生き方を
改める時と心得よ



「生き方五行 火性」

火性は 燃焼・炎であり

熱や光を生み出して

温め照らして 物事の

本質育てて 映し出す

炎は燃えて 存在し

燃え続けなきゃ 存在せず

人の命と同じなり

火性は 生命せいめいそのもので

心の臓しんと心こころにて

其の働きが現れる

完全燃焼する様に

命を燃やして 生きるなら

心の拍動活発で

血流代謝や体温上がり

老廃物や無駄なもの

しつかり排泄 スッキリする

頭脳や頭の働きも

自分の興味や探究に

向かって 思考や想像力

しつかり使えば 物事が

明るくなりて ハッキリする

燻くすぶる様に生きていりゃ

身体からだの代謝は上げられず

老廃物は蓄積し

不調や病気につながるぞ

心も燻りゃ パツとせず

頭も思考も働かず

毒吐き 周りに煙たがられて

孤立し 命は暗くなる

火は木が燃えて着く故に

自分の命の方向で

行動・表現積み重ね

木が燃える様に 命を燃やせば

小さな火でも 炎となりて

生命せいめい 明るく輝いて

未来が照らされ 見えてくる



故郷 こきやう

横山精真

晴 はれて良 よし曇 くもりても好 よし故郷 こきやうの空 そら

山 やまは緑 みどりに水 みづ清 きよく生 せい気 き充 みつ

西海 さいかいの波瀾 はらん何 いれの処 ところにか到 いたる

優 ゆう優 ゆうたる葉港 ようこう長風 ちやうふうを誘 いざなう

(語釈) 〇波瀾…大波小波。 〇優優…ゆつたりとしているさま。

〇葉港…佐世保港は楓の葉の様な形の奥まった所にある。軍港として開けた。
(西海国立公園は第一号の国立公園に指定された。)

(通釈) 故郷佐世保は晴れても曇っていてもいいものだ。山の緑、水は清い、生気が充実してくる。港内と九十九島の外海の大波小波は何処まで到るのであるうか、そしてゆつたりとした眺めの佐世保に風は誘われて遠い向こうから吹き渡って来るのだ。

故郷 令和七年九月二十二日

晴良曇好故郷空 山緑水清生氣充
西海波瀾到何處 優優葉港誘長風

帰る朝詩興が湧いて朝食前に試みたら出来た。便箋の裏に書き殴って持ち出し、テラスに居た一組のカップルに、今詩を作ったのですが、聞いて頂きますか？怪訝な顔をしたが説明を始めた。「ここは私の故郷なんです。ほれ向この小山の裾が私の家があったんです。」「今日は特に景色が良いですね。佐世保港を葉港と言うんです。」「葉っぱの港ですか？」「そうです。ほれ、湾になっている向こうから楓の葉みたいに見えるでしょ、奥まったところが此処なんです。」「難しい漢詩も言葉も眺めながらの説明は説得に富む。「波瀾は大波小波のことで、外海はずっと水平線の彼方まで見えますね、是が世界に連なっているんですよ、そしてゆつたりとして遠くから吹いてくる風を誘っているんですよ」カップルは先ずは説明を聞いてくれた。それでは吟じます。宜しく！二人は怪訝な様子からすっかり受け入れ体制に入って呉れた。

吟じ終わったら男性が「うわー、いいなー！今日は私の誕生日なんですよ」

「イヤーお目出度うございます！では是を祈念に持つて帰って下さい」と便箋の厚紙を渡した。

昨日は博多から佐世保に到る電車の中で作った詩を顔馴染みに成ったホテルのチーフに聞いて貰った。こんな厚かましい事は初めてだった。元来引つ込み勝ちな性格が不思議に思えた。

天高くどこまで遠い海をみる



“Tactical frivolity” on full display.

Source:

<https://www.themarshallproject.org/2025/10/22/trump-ice-portland-no-kings-protest>

side of the borders that Independence had painted onto the Indian sub-continent. Border crossings were difficult, then as now. Shielded by our father's diplomatic credentials, we took the little box onto the plane and to the Indian side of the border. Worried, we watched his/her difficulty breathing once the plane reached altitude. Someone thought to keep him damp. He seemed to recover once we landed, and we managed to keep him in the box long enough to take him to our

native place. Once there, he/she became an instant celebrity. Ordinary people lined up to see the little Pakistani frog! He gave up fame to disappear, likely very happily, into his new garden, not caring about its nationality.

時の輪廻

越境するカエルたち：あの時、そして今

2025年10月、道とスクリーンを埋め尽くすカエルの大行進が話題を呼んだ。

多くは空気で膨らんだ着ぐるみで、抗議のメッセージは滑稽さをともなって伝えられた。

中には、目を見開いたカエルの絵がポートランドの壁を飾り、人権や市民の権利を守ろうと呼びかけていた。

その「ふざけた感染力」は、世界に広がる権威主義の重苦しさに対する効果的な対抗手段となった。

私も画面越しにその抗議を追いかけていた一人だった。

数日間、踊るカエルたちを見ているうちに、

自分自身がかつて出会った、越境するカエルのことを思い出した。

あのとき私はほんの幼い子どもで、小さなマッチ箱に収まるほどのカエルへの好奇心が、気持ち悪さを上回った。

そのカエルは、自ら望んだわけではない旅路へと連れていかれた。

ポストコロナルの国境、緊張、対立を越えて。

色は緑だった気がするけれど、ただの茶色いアマガエルだったかもしれない。

私たち家族はインド国籍で、独立後の亜大陸に引かれた国境の向こうに住む親戚を訪れていた。

国境を越えるのは、今も昔も簡単ではない。

外交官である父の資格によって、私たちはそのマッチ箱ごと飛行機に寄せ、インド側へと連れて行った。

高度が上がるにつれ呼吸が苦しそうになり、誰かが湿らせてみようかと提案した。

着陸すると、彼（あるいは彼女）は元気を取り戻した。

地元に着くと「パキスタンのカエル」は一躍有名になり、人々が列をなして見に来た。

彼は、ある日静かに消えた。

おそらく、とても満足して。

国籍など気にもせず、新しい庭へと跳ねていったのだろう。

Circles of Time

Atiya Hussain

Transgressive frogs: Then and Now

October 2025 saw an army of frogs paraded across our streets and screens. Mostly, they were silly, as demonstrators made their unwieldy point in inflatable costumes. Others were plastered on walls in Portland, epicenter of the Frog Brigade, their bulging eyes expressing horror and inviting onlookers to join in in the defense of individual and citizen rights.

The contagion of silliness was effective in combating what has been described by the heaviness of authoritarian tendencies everywhere. I was certainly not alone in following the protests...



After several days of watching inflatable dancing, I remembered my decades earlier encounter with a frog that also overcame human limitations. I was just a little girl and my curiosity outweighed any squeamishness at the frog, so small he fit into a matchbox. Trapped in the flimsy box, the little frog had little say in the transgressive voyage that awaited him, across post-colonial borders and post-colonial antagonisms.

I seem to remember him as being green, but he might very well have been a brownish common tree frog.

My family, Indian citizens, were visiting our relatives on the other

編集室だより【二〇二五年十二月】

今 泉 由 利

歌集「地球にて」

南天の實の紅くれないの我が庭よロスアンゼルスに住み始めたり

日本の世界のニュースには外れつつ今日も私は生きている

花の咲く枝拾い我が家の初めての花とす名知らぬままに

暫くは行方見つめて立ち止まる胡桃くるみ銜くはえたるリスに出逢いて

新しき土地にただちに順応する我が子等に続く一歩一歩と

砂漠なりし名残りと乾く空気にも慣れつつ居たり昨日も今日も

英語にてまたスペイン語にて挨拶する人々ありてわれの朝々

馬の道と標識立てたる所あり私の住いのバーバンクには

左の腕が日焼けをしたりハンドルが左側なる車に乗りて

新しい土地住み始め名を知らぬ花に出逢いぬ鳥に出逢いぬ

自然なる水の流れの蛇行のままカーブする道リバーサイド・DRドレイ

仮住う思いに來たれるアメリカなり次ぎて帰らむ処はいずこ

グレープとグレープフルーツ好みつつカリフォルニアの日々の過ぎゆく

赤き灯も白き灯もみんなみなわが知らぬ人の住いのあかり

運転を覚えしてよりは土の上の草々のこと忘れて過ぐる

不自由をするが好きねと我が子等に言われているよ英語モタモタ

高々のパームツリーに風見ゆるこの木の下に住んでおります

耕せる畑をいまだ見ぬままにカリフォルニアの野菜食み食む

日本語を話したいよと我が子等の英語の生活滞りなし

吹き溜るユーカリの葉に私のガレージ掃くよ帚買ひ來て

日本とアルゼンチンとブラジルも混り私のアメリカ生活

どの空にも飛行機飛びおり朝も夜もアメリカの国飛行機の国

慣れたりと言うにはあらず戸惑いぬ今は夏なる南半球

窓開けて車走らする日続きつつカリフォルニアに春近づきぬ

言い置きておく程のこともなくなりぬ我子等はJ・Hスクール生

今日の風少しは軽くなりしかとパンパグラスの揺るる道ゆく

アマゾンの奥深くゆき金を掘る一人と共に旅をしており

ポリピアとパグワイの人とにわが留守を頼みて来にけりアルゼンチン

鈴懸の並木に今日より影のあり幼き葉つばの幼き影が

エシダの大きひと鉢運び入れ私の部屋に花の散る日々

円き月見たるばかりと思ひしが今日下弦の細き細き月

何という椰子かは知らず実を踏めり椰子の種類の数々ありて

すつぱりと鈴懸の木の影の中に入っていますよ私の車

延び立ちてま白清く咲く花よアメリカにてもカラーと言ふよ

同じ箱同じ少女のデザインなり幼き頃よりの干レーズンを

四つ目の言語を選べと指示されて田野の父兄会無事に終りぬ

85度という天気予報日本の温度に直さず聞きながしおり

少しずつ暗くなりゆく空に向かいひたすらの思いの無きこと寂し

ジャングルの中ならざれば冷え冷えの椰子の果汁の仄かに甘い

液体のゆれて鳴る音を楽しみて椰子の実つ持ちて歩みぬ

パサデナに並木のありとわが聞きて車走らせハカランダ見る

ハカランダ咲き満つる町をうろうろと楽しむがごとく寂しむがごと

ハカランダが咲けば私は満足と子等思ひおりいとも容易く

私に影響のあるは二三つと聞きており今朝のニュースを

空を見る窓ある家に住みてより月々の月毎日の星

日本に輸出したること聞えつつ米国産のチェリー食みおり

土踏まず生きているなり米国へ来たりてよりの日々の過ぎつつ

山幾つ越え行くか雲の中も暫く走るフリーウェイを

夏芝に今朝の露あり靴ぬれて歩みたのしみポストまで行く

雨の日の少なきカリフォルニアに住みながら水ふんだんに使う日常

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和七年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利